

栄光学園創立者による自筆メモの構成と内容

大野 邦夫[†]

† 株式会社 モナビIT コンサルティング

† E-mail: k-ohno@star.ocn.ne.jp

あらまし 先の年次大会で分析手法と概要を報告した栄光学園創立者の自筆メモについて本報告ではその構成と内容について紹介する。メモの具体的な内容としては、教師の政治活動、教員養成と教師の質の向上、家庭での教育の重要性、教育の原点、国家と教育、戦後教育の問題、教師のチームワーク、受験教育の問題、日本におけるカトリック教育という順序で10項目の記述に分類し個々の内容を解説した。この構成と内容に基づき、さらに栄光学園創立者が抱いた基本的な思想を遡って検討したいと考える。

キーワード XML, 栄光学園, 日教組, 家庭教育, 戦後教育, 受験教育, カトリック教会

Structure and Content of Written Memos by the Founder of Eiko Gakuen

Kunio Ohno[†]

† Monavis IT Consulting Co.

† E-mail: k-ohno@star.ocn.ne.jp

Abstract In this paper, structure and content of the memos written by the founder of EIKO Gakuen has been described, while the analysis method and outline were reported at the previous annual conference. The memos include following ten items of teachers' political activities, training and improvement of teachers, importance of home education, original point of education, government and education, troubles of postwar education, teamwork of teachers, problems of examination oriented education, and Catholic education in Japan. Based on those items, essential idea and philosophy of the founder of EIKO Gakuen should be considered.

Keywords XML, EIKO Gakuen, Teachers' union, Home education, Postwar education, Catholic church

1.はじめに

本稿では、先の年次大会で報告した[1]、栄光学園創立者の自筆メモの構成・内容把握を試みた。自筆メモは革装丁の冊子になっていて、その構成は下記の通りであった。

- (1) 手書き (9ページ)
- (2) 英文タイプ・印刷 (3.5ページ)
- (3) 和文印刷 (1.5ページ)
- (4) 記事切り貼り (6ページ)
- (5) 雑誌記事コピー (21ページ)

手書きについては、次章で紹介するが、万年筆で筆記され、英語、ドイツ語、ローマ字、日本語により独特の書体で書かれていたが、大半はローマ字であった。思考内容が日本の教育や政治、習慣、文化に関わることが多いので、英語やドイツ語に訳して記述するよりは、そのまま日本語の話し言葉で記述したものと思われる。

英文タイプ・印刷に関しては、3章で述べるが、英語のみならず、かなりの部分がやはりローマ字で記述されていた。引き続き和文印刷を4章、記事の切り貼りを5章、雑誌コピーを6章で説明する。

以上の記述を整理分類して文字コード化するために、先の報告で述べた通り、GUIに優れたDTPシステムで電子化し、さらにマークアップ言語のXMLで分類した[1]。

2.手書きメモの概要

2.1 教師の政治活動

手書きメモは、罫線の引かれたノートに9ページにわたって記されている。随筆的で多様な内容が含まれているが、意味的にはつながる内容であった。おそらく晩年の特定の時期に何らかの意図で記述したものと思われる。綴じられた記事の中に、1984年の雑誌によるものがあったので、おそらくはその前後に執筆したと考えられる。最初のページは、図1に示すように、Nikkyo-so(日教組)という表題で、教師の労働運動への批判が手厳しく記されていた。

そのXMLによる記述を下記に示すが、Interleaf6で管理した際に、オス校長が記述した部分を青字で、私が訳した和訳部分を赤字で色分けしたので、判別し易いと思われる。なお赤字は目立ち過ぎるので、和訳部分は紫色を用いた。

<ローマ字>Nikkuo-so</ローマ字>
<和訳>日教組</和訳>
<ローマ字>Kyo--iku shu-dan yori mo seijiteki soshiki shu-dan de aru</ローマ字>
<和訳>教育集団よりも政治的組織集団である</和訳>
<ローマ字>Osoraku, sekai no dono kenni mo Kyo-inkumaiayorimo!shakaishugiKakumeiniisankadankai</ローマ字>
<和訳>おそらく世界の権威の教員組合よりも社会主義革命に参加段階</和訳>

オス校長は、カトリックの司祭と言う立場で、共産主義には反対である。かと言って文部省や自民党を支持しているわけではないし、日本のリベラルな知識人のように社会党や労働組合を中心とする戦後民主主義を支持しているわけ

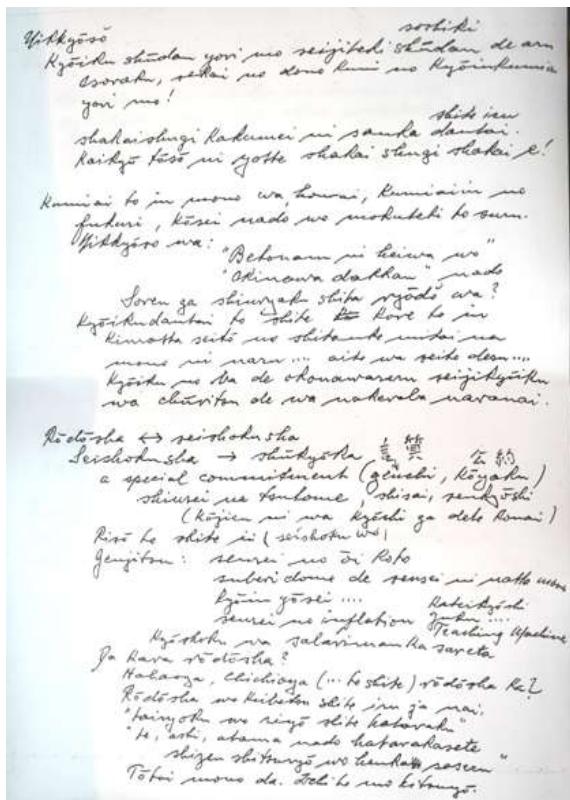


図1 手書きローマ字原稿の例

けでもない。おそらくオス校長が日本の教育者や教育関係者で、眞の日本の教育のリーダーとして信頼を置ける人物は存在せず、是々非々の立場で自問自答を繰り返したのではないかと思われる。このメモは、その自問自答を綴ったものと思われる。

2.2 教員養成と教師の質の向上

前述の教師の政治活動に關係して、「聖職者」か「労働者」かに関する記述が続く。この議論は、1950年代に、日教組が結成された際に問題になり、公務員の労働基本権のあり方の一環として国民的な対立を招いた問題であった。オス校長は自らが聖職者であることもあり、労働者ではなく「聖職者」の立場である。しかし、そのような社会的な議論はともかく、現場における教師の意識はサラリーマンであり、自らを聖職者と認識する教師は極めて限られていた。

<ローマ字>suberidomedesenseini nattemiru</ローマ字>

<和訳>滑り止め先生になっている</和訳>

<ローマ字>kyo-in yosei ... Kateikyo-shi</ローマ字>

<和訳>教員養成... 家庭教師</和訳>

<ローマ字>sensei no inflation Jukan ...</ローマ字>

<和訳>先生のインフレーション 受験</和訳>

<ローマ字>Kyo-shokuwasalarimankasareta</ローマ字>

<和訳>教職はサラリーマン化された</和訳>

教員の質の向上が重要であることを問題にしているが、この問題は1950年代当時から「でもしか教師」というよう

なキーワードで問題にされてきた。「でもしか教師」は「教師にでもなろうか」、「教師にしかなれない」という風潮をもじったものであるが、この言葉の発明者は、三木内閣の文部大臣を務めた永井道雄氏である。その状況は、「教師・この現実」[2]という著書において克明に紹介されている。永井道雄氏は、聖職者か労働者かという議論に対しては、「聖職者でありかつ労働者である」という立場を取る。弁証法的にアウフヘーベンする議論であるが、日本社会でこのような対立した議論が融合する形式に発展できなかつたことが戦後の日本の教育にとって不幸であったと思われる。

2.3 家庭での教育の重要性

家庭での両親による教育の重要性を指摘する。オス校長にとっては、炭鉱夫であった父親から学んだことが絶大であった。この詳細については、著書の「日本の父へ」で詳細に語られている[3]。優れた父親からの薰陶で、オス校長は家庭教育の重要性を身に染みて感じていたと思われる。両親の教育は子供への愛情に基づくものであり、仕事への対価を要求する労働者的ではない。なお判読できなかつたローマ字もあり、その部分は疑問符を記した。

<ローマ字>Ryo-sin wa sono imi de ??? ro-d-sha ja nai</ローマ字>

<和訳>両親はその意味で??? 労働者じゃない</和訳>
Ningen to iu hitotsu no seimei wo azukari, sore wo oshie so-datete iku shigoto de aru.</ローマ字>

<和訳>人間と言ふ一つの生命を預かり、それを教育していく仕事である</和訳>

<ローマ字>“sei” de tsunagatte iru sensei seito</ローマ字>

<和訳>「生」でつながっている先生 生徒</和訳>

<ローマ字>Sono shinseikan ga usurete shima to</ローマ字>

<和訳>その神聖観が薄れてしまうと</和訳>

<ローマ字>hitsuyo na prids wa nakunaru</ローマ字>

<和訳>必要なプライドは無くなる.</和訳>

<ローマ字>Sono prids wo ho-ki shiteshimatta?!</ローマ字>

<和訳>そのプライドを放棄してしまった？！</和訳>

父親からの薰陶を経験したオス校長の価値観は、必ずしも普遍的とは言えないであろう。歴史を通じて家庭的には恵まれなかつた人も少なくはない。子供の価値観に、戦後のTV番組等のマスメディアの影響が強められ、さらに最近はインターネットによる影響も少なくはない。離婚する夫婦も増えている。そのような観点からすると、家庭での教育は難しくなつていると思われる。

2.4 教育の原点

オス校長の人間観を通じた教育論である。「悪い少年はいない」という前提で、人間には教育が必要なことを、パスカルやカントの哲学思想に基づき論じている。

<ローマ字>1. “Warui sho-nen ga nai”</ローマ字>

<和訳>1. 悪い少年は無い</和訳>

<ローマ字>2. Demo, warui jo-ken no naka de, fuann na jo-tai</ローマ字>

<和訳>2. でも、悪い条件の中で、不安な状態</和訳>
 <ローマ字>3. Soto no jo-ken wo (soto kara no eikyo wa) betsu ni shite mo, kyo-iku wa hitsuyo</ローマ字>
 <和訳>3. 外の条件は（外からの影響は）別にしても、教育は必要</和訳>
 <英語>Man is a thinking reed (Pascal)</英語>
 <和訳>人間は考える葦である（パスカル）</和訳>
 <ローマ字>Kangaeru koto no dekiru ashi (numani ippai haete iru)</ローマ字>
 <和訳>考えることのできる葦（沼にいっぱい生えている）</和訳>
 <ローマ字>Kaze ni hidoku yureru yowayowasii kusa</ローマ字>
 <和訳>風にひどく揺れる弱々しい草</和訳>
 <ローマ字>Sukininarumonowa:Kangaeru Kotoga dekiru / Dakara Kyo-iku</ローマ字>
 <和訳>好きになるものは：考えることができる／だから教育</和訳>
 <ローマ字>4. Kant:</ローマ字>
 <和訳>4. カント：</和訳>
 <ローマ字>Ningen wa Kyoiku sareru</ローマ字>
 <和訳>人間は教育される</和訳>
 <ローマ字>Ningen wa Kyoiku seneba naranai</ローマ字>
 <和訳>人間は教育せねばならない</和訳>
 <ローマ字>Ningen wo Kyoiku ga dekiru no wa Ningen dake de aru</ローマ字>
 <和訳>人間を教育するのは人間である</和訳>
 <ローマ字>5. Kangaeruchikara---sodatete yaru, nobasu, migaku</ローマ字>
 <和訳>5. 考える力——育ててやる、伸ばす、磨く</和訳>
 子供が知識を獲得し、思想を育っていく過程を、パスカルの葦の譬えを元に考察している。その弱々しい葦が、強くなるには考える力を育て、伸ばし、磨くことが必要で、そのため教育が必要であることを論じている。先の報告[1]で紹介したが、12期生の卒業アルバムに載せられた、Life is a leaf of paperwhite・・・では、人生を一葉の紙に譬え、その上に一語か二語を記述する経緯になぞらえたが、パスカルの考える葦との比喩を感じさせられた。

2.5 国家と教育

戦前の日本の教育は、国家のための人材育成で、教育勅語や修身教育により国家に奉仕する知識や技術の教育が行われたが自由に考え個人を自立させるような教育は行われなかつた。戦後は、国家が経済に代わっただけで、やはり知識、技術偏重の教育が行われていることを述べている。

<ローマ字>Meiji irai : Kokka zukuri ↔ Ningen zukuri</ローマ字>
 <和訳>明治以来：国家造り ↔ 人間造り</和訳>
 <ローマ字>Kokka ni totte yu-ri na chishiki, gjutsu</ローマ字>
 <和訳>国家に取って有利な知識、技術</和訳>
 <ローマ字>X Meiji jidai no jiyu-shiso!</ローマ字>
 <和訳>X 明治時代の自由思想！</和訳>

<ローマ字>Kyo-iku Chokugo --- Shu-shin Jugaku, (Jukyo- wo cchu-shin ni shita) kyo-iku</ローマ字>
 <和訳>教育勅語 --- 修身、儒学、（儒教を中心とした）教育</和訳>
 <ローマ字>X Sengo : Kokka wo shakai ni Kokka wo kei-zai ni surikaeta, economic animal</ローマ字>
 <和訳>X 戦後：国家を社会に国家を経済に替えた、エコノミックアニマル</和訳>
 明治維新から、国家主義的な教育が制度化されるまでは、福沢諭吉や中江兆民等による在野の人々による自由民権運動が起こり、オス校長は「明治時代の自由思想」としてそれを記述している。その後、大日本帝国憲法の発布や帝国議会の召集を経て、日本が近代国家の制度的な枠組みを整える段階で、教育が国家建設の手段として用いられ、政教一致の体制になり、その結果第二次大戦による敗北を迎え、占領軍による占領行政の下で戦前の教育は廃止された。占領軍は、日本の教育が、日本の軍国主義の元凶であり、これを廃止することが日本の民主化にとって必要であると見做したのであった[4]。だがオス校長は、日本の政府や世論が、国家を社会に置き換え、目的を国家から経済に置き換えたと見做したのであった。

2.6 戦後教育の甘やかし

戦前の国家主義教育は廃止されたが占領軍によりもたらされた戦後民主主義は、人間教育への厳しさを失い、全面的に甘やかす教育になったというのがオス校長の認識である。

<ローマ字>Senzen no kyoiku no urazuke to natta shiso-wa dame datta ga・・・</ローマ字>
 <和訳>戦前の教育の裏付けとなった思想は駄目だったが・・・</和訳>
 <ローマ字>Furui mono wa haishi sareta</ローマ字>
 <和訳>古いものは廃止された</和訳>
 <ローマ字>Atarashii mono?</ローマ字>
 <和訳>新しいもの？</和訳>
 <ローマ字>Minshu shugi : atatakana atarashii do-toku to shite</ローマ字>
 <和訳>民主主義：温かな新しい道徳として</和訳>
 <ローマ字>Sonokekka: amayakashi houdai</ローマ字>
 <和訳>その結果：甘やかし放題</和訳>

戦後の民主主義は、平和憲法に基づく国是であるが、政府自民党は占領軍により制定された平和憲法を改正することを意図し、人材育成に関しても経済界からの要求に基づく願望を抱いていた。その具体的な内容を文部省の中央教育審議会が「期待される人間像」として提案したことがあつたが、野党や学術会議などの世論からの非難で社会的には受け容れられなかつた経緯がある。オス校長も、その件に触れている。

<ローマ字>9. kitai sareru ningenzo-, kitai sub-eki seitozo-?</ローマ字>
 <和訳>9. 期待される人間像、期待すべき生徒像？</和訳>
 <ローマ字>Gov. yori ningen - shakaijin</ローマ字>

<和訳>Gov.より人間－社会人</和訳>
 <ローマ字>善人 wo tsukuru 全人 kyouiku!</ローマ字>
 <和訳>善人を造る全人教育！</和訳>
 <ローマ字>Keizai Doyu-kai</ローマ字>
 <和訳>経済同友会</和訳>
 <ローマ字>Eiko --- Bonsai = Zukuri</ローマ字>
 <和訳>栄光 --- 盆栽=造り</和訳>
 <ローマ字>→ Gakureki hencho → Chishiki yu-sen → Seiseki no tame </ローマ字>
 <和訳>→学歴偏重→知識優先→成績のため </和訳>

経済同友会が、「期待される人間像」に関連して何らかのレポートを提言したのであろう。その文書に関連して、オス校長は、日本の受験教育を盆栽作りに譬える比喩を考えついたように思われる。このことは、先の報告[1]で述べたとおり「日本の父へ再び」[5]の中で『点取り親がつくる「ボンサイ』』というテーマで取り上げられている。

2.7 教師のチームワークで自立教育を目指す

受験教育と甘やかし教育への対処は、公立学校では難しいが、私立学校であれば教師のチームワークにより改善する可能性があることを述べている。

<ローマ字>Iede shinei ka? Jisatsu shinai ka to iu / koto de "nan de mo yurushite yaru"</ローマ字>
 <和訳>家出しないか？自殺しないかということで「何でも許してやる」</和訳>
 <ローマ字>(9) Ko-ristu de : "Kimitsu" ga nai / Shiritsu de no tokucho-!!</ローマ字>
 <和訳>(9) 公立で：「規律」が無い..私立での特徴！！</和訳>
 <ローマ字>Demo, Kimitsu no tame no kimitsu de ha naku</ローマ字>
 <和訳>でも、規律のための規律ではなく </和訳>
 <ローマ字>(10) Wareware no gakko / kyo-shi no team work</ローマ字>

<和訳>(10) 我々の学校 教師のチームワーク </和訳>

公立学校は、文部省の通達に縛られ、地域の教育委員会の管理下にあるので、特徴ある柔軟な教育方針を出すことは難しいが、私立学校は宗教的な背景から、倫理的・道徳的な考えに基づき、人間性に富んだ自立的・人格的な教育を行うことが可能である。だがその方針は、チームワークとしてせざるを得ないので教員の賛同を得る必要がある。

<ローマ字>○ Kokoro notadashii --- kiyoi --- omoi-yari no aru --- ???</ローマ字>
 <和訳>○ 心の正しい --- 清い --- 思いやりのある --- ?</和訳>
 <ローマ字>no aru --- jiriki de jinsei wo okuru koto no de-kiru</ローマ字>
 <和訳>のある---自力で人生を送ることができる</和訳>
 <ローマ字>ningen! → Dono jidai ni motsuyo - suruning de aru Jidai ya Kokkyo wo Koeru...</ローマ字>
 <和訳>人間→どの時代にも通用する人間である・・・時代や国境を超える </和訳>

教育の目的は、理想的には時代や国境を超えて通用する自立的な人材の育成にある。日本でその可能性を有するのは、国や地方自治体の制約が大きな公立校よりは、自由に方

針を定め、チームワークで教育できる私立校の方が可能性があることを示唆している。

2.8 日本の教育の問題：自立より受験

そのような自立した人材育成を目指す教育方針のための障害になるのが、日本の国民の教育への期待である。日本の家庭では、子供が勉強して試験に受かる良い学校に進学し、立身出世することを重視する。先に述べたとおり、オス校長はそれを盆栽作りに譬えている[5]。

<ローマ字>○ Nihon de no "yoi ko" no teigi: benkyo - no dekiru ko</ローマ字>
 <和訳>○ 日本での「良い子」の定義：勉強のできる子 </和訳>
 <ローマ字>○ Nihondenoiwayuru "iigakko" -:</ローマ字>
 <和訳>○ 日本のいわゆる「良い学校」 - : </和訳>
 <ローマ字>O-zei no seito wo, na no aru jo-kyu - no gakko - ni,</ローマ字>
 <和訳>大勢の生徒を、名のある上級の学校に、</和訳>
 <ローマ字>ii kaisha ni,</ローマ字>
 <和訳>良い会社に、</和訳>
 <ローマ字>hairareruseitowotsukurugakko-.</ローマ字>
 <和訳>入れる生徒を造る学校 -. </和訳>
 <ローマ字>Sugureta seito wa: Sugureta shingaku ga deki-ru seito.</ローマ字>

<和訳>優れた生徒は：優れた進学ができる生徒 </和訳>

従って、受験教育に批判はあるものの、それを無視しては学校経営は成り立たない。栄光学園は、オス校長の意図とは別に、受験校として有名になり、東京大学への入学者数では神奈川県屈指の高校に名を連ねると共に、オス校長の名前も知られるようになった。

2.9 日本におけるカトリック教育

有名受験校の校長・教育者として、カトリック教会関係のミッションスクールとしての経営の問題の相談を持ちかけられた模様であった。それは受験教育と言う日本の家庭からのプレッシャーを受けつつ、布教を行うための教育をいかにすべきかと言う問題と思われる。

<ローマ字>○ Sei Maria Sho-gakko - ni totte hitotsu no dilema.</ローマ字>
 <和訳>○ 聖マリア小学校にとって一つのジレンマ </和訳>
 <ローマ字>Kyo - kunogakko - toshite, shinja.</ローマ字>
 <和訳>教区の学校として、信者 </和訳>
 <ローマ字>Soko de so - to - na Kakusa ga aru. --- shupatsu ten / ni oite no "Kngaku seishin" </ローマ字>
 <和訳>そこで相当な格差がある --- 出発点においての「建学精神」 </和訳>
 <ローマ字>Sono Kakusanimo Kakawarazu Nihonfu - noii / gakko ni nariuru/ no ka?</ローマ字>
 <和訳>その格差にも関わらずに日本風の良い学校になり得るのか？ </和訳>

男子校の栄光学園で成功したモデルを女子の小学校、中学・高校でも継承できないかと言う課題であったのだろう

神奈川県ではフェリス女学院が女子の中學・高校の名門受験校になっていたが、カトリックの清泉女学院はフェリスに及ばなかった。そこでフォス校長が考えたのは、小学校と中学を統合して9年間のカリキュラムとし、特徴ある教育を行うものであった。特徴ある教育は基本学習に重点を置く方針であるが、その一つは、英語教育であり、それを小学校から始めて、聖マリア小学校と清泉中学との連携を試みるものであった。

<ローマ字>(1) Kyo-kakatei --- 小 + 中 9年間 </ローマ字>

<和訳>(1) 教科課程 --- 小 + 中 9年間 </和訳>

<ローマ字>\ Ikkanshitakyo-iku/Kano-dewanaiKa./ Sore ???</ローマ字>

<和訳>\ 一貫した教育 可能ではないか</和訳>

<ローマ字>Kenkyu- --- Kakkamoku goto ni</ローマ字>

<和訳>研究---各科目毎に</和訳>

<ローマ字>Ta Kamoku to no Kanrensei.</ローマ字>

<和訳>他科目との関連性</和訳>

<ローマ字>\ Itteishita, nannen kanniwataru Keikaku</ローマ字>

<和訳>一定した、何年間にわたる計画</和訳>

<ローマ字>○ Kihonteki gakushu- ni ju-ten \ Seisen / Maria / Eigo...</ローマ字>

<和訳>○ 基本的学习に重点\清泉、マリア、英語</和訳>

<ローマ字>○ Team Work : Keikaku, Kenkyu- no dankai</ローマ字>

<和訳>○ チームワーク：計画性、研究の段階</和訳>

このような企画は、フォス校長だけで検討したとは思われない。おそらくは、聖マリア小学校や清泉女学院の関係者とも相談して可能性を追及したのではないかと思われる。

2.10 肩書や学歴でない良い人間の育成

日本の家庭では、子供の自主性を尊重するが、子供（生徒）は偉い人になりたがり、親はそれを勧めると共に強制する文化がある。

<ローマ字>○ le de no "taido"</ローマ字>

<和訳>○ 家での「態度」</和訳>

<ローマ字>○ Jishusei no Soncho-</ローマ字>

<和訳>○ 自主性の尊重</和訳>

<ローマ字>Seito wa do : Erai hito ni naritai.</ローマ字>

<和訳>生徒はどう：偉い人になりたい</和訳>

<ローマ字>Erai hito to wa: Oisha, Bengoshi, 大 no Kyo-ju</ローマ字>

<和訳>偉い人とは：医者、弁護士、大学の教授</和訳>

子供や親が考える偉い人は、医者、弁護士、大学教授のような金持で肩書の立派な高い地位にある高学歴の人物である。

<ローマ字>Katagaki ya gakureki chushin</ローマ字>

<和訳>肩書や学歴中心</和訳>

<ローマ字>le wa: Yu-bin no haitaisu nin</ローマ字>

<和訳>家は：郵便の配達人</和訳>

<ローマ字>Oso-ji suru obasan</ローマ字>

<和訳>お掃除するおばさん</和訳>

<ローマ字>"li hito nara..." --- Demo li hito to wa?</ローマ字>

<和訳>「良い人なら...」 --- でも良い人とは?</和訳>
<ローマ字>(左上)li hito / koso sugureta / ningen → Shinja ja nai Koto</ローマ字>

<和訳>良い人こそ優れた人間→信者じゃない </和訳>

日本の教育においては、社会の底辺で働くような仕事への配慮や価値観に乏しい。本来の教育の目的は「良い人、良い社会人」を育成することにあるが、それを日本の家庭や生徒の価値観とすることが課題である。ミッションスクールは、布教が目的で、信者を増やすことが目的のように語る人がいるが、日本においては良い社会人である優れた人間を養成することであるというのがフォス校長の教育観であったと思われる。

3. 英文タイプ・印刷と和文印刷

3.1 英文タイプ・印刷部分の構成

英文タイプ・印刷は3.5ページであるが、「A STUDENT TO HIS TEACHER」というまとまった印刷と「英知大學」と記された便箋にタイプライター打ちされたもの、並びに、「Rinri」という表題と「Ippan kyoka to dotoku no shido-」という表題が付されたタイプライター打ちのメモで構成されていた。

最初の、「A STUDENT TO HIS TEACHER」は、図2に示すように箇条書きの文章が羅列されていた。それをXML

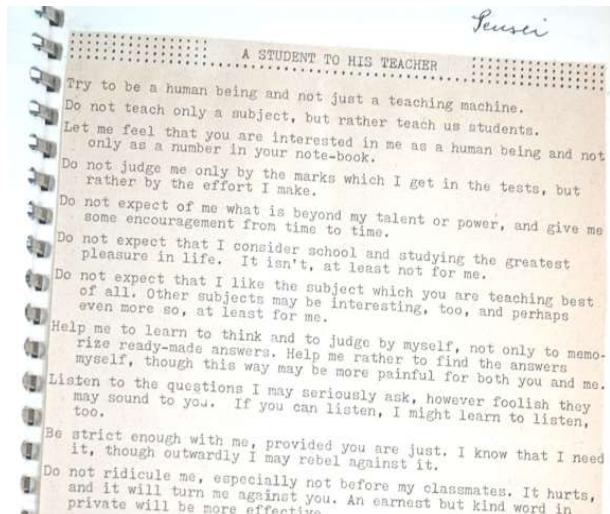


図2 英文印刷の例

化したデータで引用する。

<英語> . . . A STUDENT TO HIS TEACHER . . .

- Try to be a human being and not just a teaching machine.
- Do not teach only a subject, but rather teach us students.
- Let me feel that you are interested in me as a human being and not only as a number in your note-book.
- Do not judge me only by the marks which I get in the tests, but rather by the effort I make.
- Do not expect of me what is beyond my talent or power, and give me some encouragement from time to time.
- Do not expect that I consider school and studying the greatest pleasure in life. It isn't, at least not for me.
- Do not expect that I like the subject which you are teaching best of all. Other subjects may be interesting, too, and perhaps even more so, at least for me.
- Help me to learn to think and to judge by myself, not only to memorize ready-made answers. Help me rather to find the answers myself, though this way may be more painful for both you and me.
- Listen to the questions I may seriously ask, however foolish they may sound to you. If you can listen, I might learn to listen,
- Be strict enough with me, provided you are just. I know that I need it, though outwardly I may rebel against it.
- Do not ridicule me, especially not before my classmates. It hurts, and it will turn me against you. An earnest but kind word in private will be more effective.

この内容は、後に3.5節で紹介する和文の英訳である。内容は3.5節を参照して頂きたいが、フォス校長がこの箇条書きに強い興味を持ったことは確実である。内容から察して、最初に日本語を読み、何らかの場で紹介・議論するために、それを英訳したと思われる。

3.2 英知大学の便箋に記された内容

Web情報によると、英知大学は、1963年にカトリック大阪大司教区が兵庫県尼崎市に設立したミッションスクールで、日本で唯一のカトリック教区立大学であったが2015年に廃止された。オス校長のメモに図3に示すように英知大学の便箋に英文タイプで印字され、さらに新聞か雑誌から切り抜かれた英文の紙片が貼りつけられている。その冒頭にオス校長によると思われる英語の文章が下記のようにタイプ打ちされている。

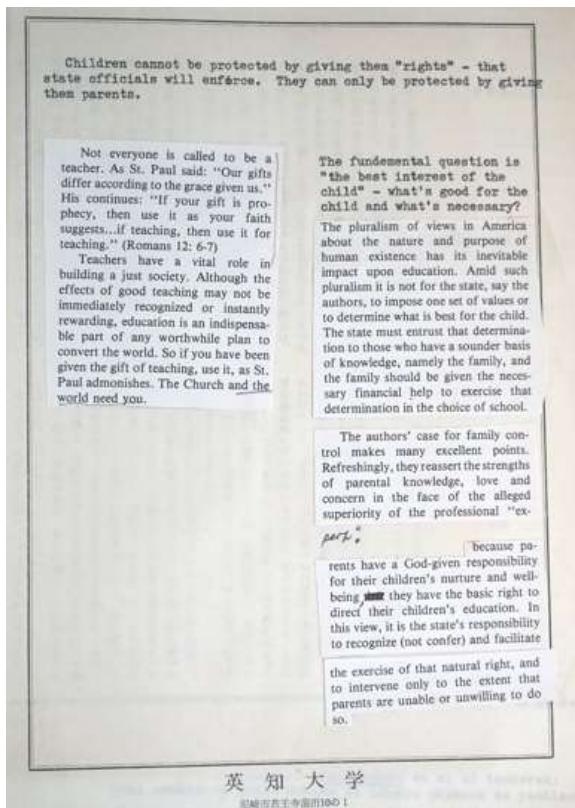


図3 英知大学の便箋に記された英文印刷情報

<英語> Children cannot be protected by giving them "rights" —— that state officials will enforce. They can only be protected by giving them parents. </英語>

<和訳> 子供に「権利」を与えることによって子供を保護することはできない——国家制度が強制する。子供は親を通じてのみ保護することができる。 </和訳>

その後は、切り抜かれた英文が貼りつけられているが、子供を育てる上での教育に関するキリスト教的な思想が記されている。この英文は、新聞か雑誌からの切り抜きであるが出典は不明である。オス校長の価値観に触れた内容と思われる。

<英語> Not everyone is called to be a teacher. As St. Paul said: "Our gifts differ according to the grace given us." His continues: "If your gift is prophecy, then use it as your faith suggests...if teaching, then use it for teaching." (Romans 12: 6-7) </英語>

<和訳> 誰もが教師として召されるわけではない。聖パウロが言ったように：私たちの贈り物は私たちに与えられ

た恵みによって異なる。（ローマ人への書簡12:6-7） </和訳>

この内容は、2.3節の「家庭での教育の重要性」、2.4節の「教育の原点」、2.5節の「国家と教育」に関する記述の背景情報として位置づけられるように思われる。要するに、教職は神からの召し出しであり、神聖であるという立場に立つ。次に米国の多元的な価値観と教育のあり方、さらに国家との関係が述べられている。

<英語> The fundamental question is "the best interest of the child" —— what's good for the child and what's necessary? The pluralism of views in America about the nature and purpose of human existence has its inevitable impact upon education. Amid such pluralism it is not for the state, say the authors, to impose one set of values or to determine what is best for the child. The state must entrust that determination to those who have a sounder basis of knowledge, namely the family, and the family should be given the necessary financial help to exercise that determination in the choice of school. </英語>

<和訳> 基本的な問いは「子どもへの最善の利益」である——子どもにとって何が良いか、何が必要なのか？人間の存在の本性と目的に関するアメリカの多元的な見方は、教育に必然的な影響を及ぼす。そのような多元論の中で、国家が一組の価値観を課したり、子供にとって何が最善であるかを決定したりすることはない。国家はその決定をより健全な知識の基礎を持っている人々、すなわち家族に委ねなければならず、家族は学校の選択においてその決定を行使するために必要な財政的援助を与えられるべきである。

</和訳>

米国的な価値観を否定してはいないが、それに委ねるとても、国家が家庭を上回る権威を持つことはあり得ないと言明する。

<英語> Because parents have a God-given responsibility for their children's nurture and well-being, they have the basic right to direct their children's education. In this view, it is the state's responsibility to recognize (not confer) and facilitate the exercise of that natural right, and to intervene only to the extent that parents are unable or unwilling to do so. . . . </英語>

<和訳> 親は子供たちの養育と幸福に対して神から責任を与えられているので、子供たちの教育を指示する基本的な権利を持っている。この視点では、その自然の権利の行使を（授与されるのではなく）認識して実施し、親がそうすることができないか、またはそうすることを望まない場合にのみ国の責任で介入することができる。 . . . </和訳>

結局、子供の教育権は本質的に親にありそれは神から委託された神聖な義務である。国家が代わり得るのは、親がその権利・義務を果たし得ない場合に限るという論旨である。オス校長の思想そのものではないにしろこの視点が重要と考えていたことは明確であろう。

3.3 倫理

さらに、冒頭に「倫理」と記してタイプされた文章が記されている。

<ローマ字> Rinri: </ローマ字>

<和訳> 倫理： </和訳>

<ローマ字>Zen wo nase! to iu yobikake</ローマ字>
 <和訳>善をなせ！という呼びかけ</和訳>
 <ローマ字>Aku wo sute yo! to iu shiji Zenaku no handan</ローマ字>
 <和訳>悪を捨てよ！という指示 善悪の判断</和訳>
 <ローマ字>Dooki no teikyoo matawa setsumei (Shizenhoo ni yoru; shikkarishita ningenzō; kokorono akogare; mohanninarujinbutsu.....</ローマ字>
 <和訳>動機の提供または説明
 (自然法による；しっかりした人間像；
 心の憧れ；模範になる人物像；</和訳>
 <ローマ字>Yoku yaro – to iu kokorogamae Zen no tame ni tatakau to iu hariai</ローマ字>
 <和訳>良くやろうという心構え
 善のために戦うという張り合い</和訳>
 <ローマ字>Setsumei ni suginai; nerai:wakattemorau, natokushitemorau;naiyowatokidokichu – sho – teki.</ローマ字>
 <和訳>説明に過ぎない；狙い；分かってもらう 納得してもらう；内容はときどき抽象的.</和訳>
 <ローマ字>Gakkouseikatsu wa naratta koto no renpei-jo-.</ローマ字>
 <和訳>学校生活は習ったことの練兵場</和訳>
 倫理教育は、良心を呼び起こすことであるが、言葉による説明の困難さを自認している。言葉で教えて理解させるよりも、言葉を繰り返して受肉されるような考えと思われる。「練兵場」という語彙がそれを物語るが、上半身裸で行進し、ラジオ体操を行う「中間体操」を髪髪させられた。
 私が在学当時の栄光学園には「社会倫理」という教科があり、キリスト教に基づく倫理を教えていた。「偉大なる人間」、「良き人間」、「良き社会人」という教科書があり、市民として社会生活するための基礎となる価値観を、カトリック神学に基づき論じる手法で考えさせる内容であった。日本社会の価値観とは異質な面も多かったが、後の高等教育でリベラルアーツを学ぶためには有益な知識となった。

3.4 一般教科と道徳

さらに図4に示す、「一般教育と道徳の指導」という表題でタイプ打ちされた文章があった。

<ローマ字>Ippankyoatatotokunoshido –</ローマ字>
 <和訳>一般教科と道徳の指導</和訳>
 <ローマ字>Dotoku kyoiku wa rinri no jugyou ni todomaru mono de wa nai. Dotokuteki tadasii seikatsu no hitsuyousei oyobi sono jittai, matawa wa sono utsukushisa nado rinri no jikan de oshieru wake nan desu ga, dotokukyoiku sono mono wa tano gakka no shido to missetsu ka kei wo motte iru. De aru kara zenbu no senseigata ga sore ni sekkyokuteki ni sanka ga dekiru shi, sanka shinakereba naranai gimu mo aru.</ローマ字>

<和訳>道徳教育は倫理の授業にとどまるものではない 道徳的、正しい生活の必要性およびその実態、またはその美しさなど倫理の時間で教えるわけなんですが、道徳教育そのものは他の学科の指導と密接関係を持っている。であるから全部の先生方がそれに積極的に参加ができるし、参加しなければならない義務もある。</和訳>

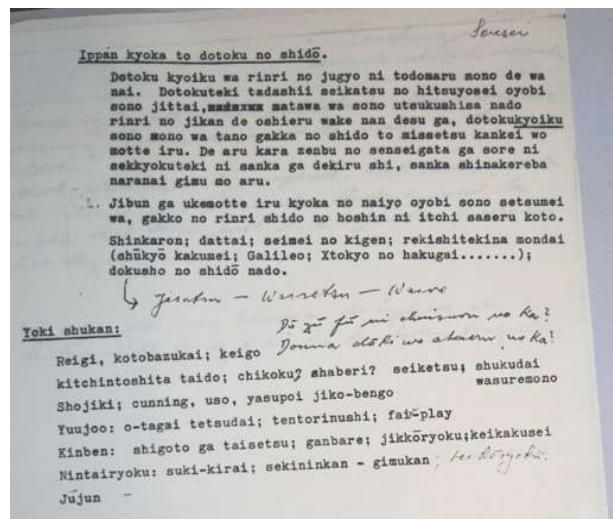


図4 英文タイプの例

<ローマ字>Jibun ga ukemotte iru kyoka no naiyo oyobi sono setsumei wa, gakkō no rinrishido no hoshin ni itchi saseru koto.</ローマ字>
 <和訳>自分が受け持っている教科の内容およびその説明は、学校の倫理指導の方針に一致させること。</和訳>
 <ローマ字>Shinkaron; dattai; seimein no kigen; rekishitekina mondai (shu – kyo – kakumei; Galileo; Xtokyo no hukugai....); dokusho no shido.</ローマ字>
 <和訳>進化論；墮胎；生命の起源；歴史的な問題（宗教革命；ガリレオ；キリスト教の迫害....）；読書の指導</和訳>

倫理以外の教科においても、人間のあり方、社会人としての生き方に関係付けた教育の必要性を論じている。2.7節で提案しているチームワークの背景は、この辺りに存在すると考えられるのではないかだろうか。

3.5 和文印刷

先に3.1節で紹介した英文の元になった日本語文章を図5に示す。心の通わない生徒と教師との関係について、生徒側の気持ちを箇条書きに綴った文章である。和文が最初にあり、それをフォス校長が英訳したと思われるが、その理由は教師が一方的に生徒に情報発信し、それを理解暗記させる日本の学校教育の状況を物語っており、その問題を指摘するためであろう。教師と生徒を人間的には対等に扱う欧米の人間関係なら、このようにはならないであろう。師弟関係を上下関係と規定するのは、儒教文化の特徴であるが、欧米のキリスト教文化と、日本の儒教文化では、師弟関係には大きな落差があると思われる。

<和文印刷>ある生徒から教師への願い

1. どうか人間であって下さい。ティーチングマシンだけはならないで下さい。
2. どうか学科目を教えることばかりに気をとられないで下さい。私たち生徒自身を教えてほしいのです。
3. どうか人間としての私に興味を持っていると思わせてください。えんま帳の一つの番号としてではなく。

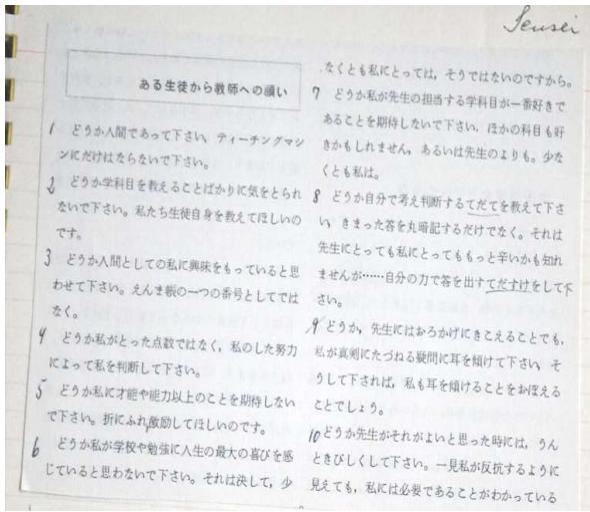


図5 和文印刷の例

4. どうか私がとった点数ではなく、私のした努力によって私を判断してください。・・・</和文印刷>

全体では17項目あり、以上はその一部にすぎない。おそらく出典は、いじめなどで混乱しつつある生徒と教師の問題を取り上げた地域の教育系又は父兄等の研究グループによる印刷物ではないかと思われる。1980年代になって、校内暴力やいじめが日本の教育問題として顕在化し、その問題に関心を持ったフォス校長が、教育関係者への問題提起として、その印刷文書を取り上げたのではないかと推察される。手書きの内容における2.4節の「教育の原点」、2.2節の「教員養成と教師の質の向上」に関係する内容であり、フォス校長が強く心を痛めていた問題と思われる。

3.6 手書きと印刷の相違

手書きのメモが、思いついた内容を隨筆的に綴ったのに対し、タイプ打ちや製版された印刷情報は、系統立てまとまった内容となっており、手書きの内容を確認、補強し、フォス校長の想いを伝達するための印刷媒体として対外的に公開する役割を演じていると感じられる。この自筆メモが作成されたのが、1984年前後と考えられるので、その当時は文部省の視学委員に任命されており、その活動の関係で配布使用されたのではないかと思われる。

4. 新聞・雑誌の切り抜き

新聞・雑誌の切り抜きが6ページあった。これらはフォス校長が気になって切り抜いたものと思われるが、出典は全て不明である。その中で、先ずフォス校長が感想を記した3事例を紹介し、その後で他の記事を紹介する。

4.1 落ちこぼれ

いわゆる落ちこぼれの生徒に対する問題を提起した新聞記事と思われる。

<記事:出典不明>

<本文>進学というレールに乗れそうもない、または乗りそこなった子どもを、学校および彼等自身の親を含めて世間はどうみているのでしょうか。このようなこどもに彼等自身の存在価値をはっきり示してやらないならば、彼等は自分

自身を世間のはみだしものとしか考えないでしょう</本文></記事>

この記事に対して、フォス校長は下記のようにコメントしている。冒頭は自筆メモの中では稀な日本語によるメモである。

<手書き><日本語>先生と生徒の関係は、「勉強が出来る」とい条件付きのものとならないよう！</日本語>

<ローマ字>「Kyo-iкуわひと」toiufurukukaraiwareteiru Kotoba ga aru. </ローマ字>

<和訳>「教育は人」という古くから言われている言葉がある。</和訳>

<ローマ字>Oshieru hito wa ikani yotte osowaru mono wa higosaseru to iu koto da. </ローマ字>

<和訳>教える人はいかにして教わる者を庇護させるということだ。</和訳></手書き>

集団への教育では、優劣の発生は仕方がないが、付いて行けないいわゆる「落ちこぼれ」の生徒に対する配慮を記している。手書き内容の2.2節の「教員養成と教師の質の向上」、2.8節の自立より受験を目指す「日本の教育」の問題が関係するように思われる。

4.2 教師像の変化

図6に示す場合も切り抜き記事とそれにフォス校長が感想を記している例である。

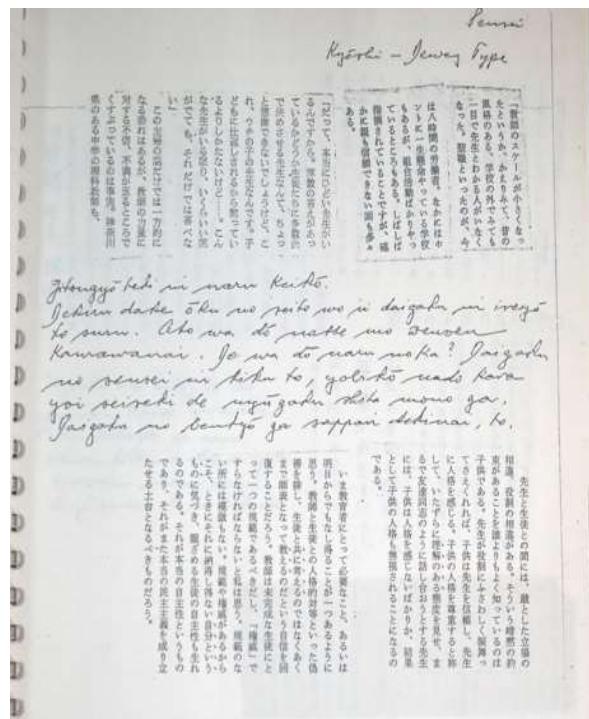


図6 新聞切り抜きの例

<記事:出典不明>

<本文>教師のスケールが小さくなつたというか、かえりみて、昔の風格のある、学校の外でみても一目で先生とわかる人がいなくなつた。聖職といったのが、今は八時間の労働者。なかにはホントに一生懸命やっている学校もあるが、組合運動ばかりやっているところもある。しばしば指摘されて

いることですが、確かに親も信頼できない面も多々ある。

・・・</本文>

戦後の教育が、教育勅語に基づく戦前の教育の否定から出発し、占領軍による米国流の教育制度の施行が出発点であつたことに若干の無理があつた。それを戦前に戻す風潮が自民党政府と文部省に存在し、その問題が1980年代まで解決されず、現場での混乱が継続したと考えられる。次の切り抜きは、ひどい先生の例を紹介している。

<本文>「だって、本当にひどい先生がいるんですから。算数の答えがあつて、どうか生徒たちに多数決で決めさせる先生なんて、ちょっと想像できないでしようけど――。こんな先生がいる限り、いくらいい案がでても、それだけでは喜べない」この主婦の話だけでは一方的になる恐れはあるが、教師の力量に対する不信、不満が至るところでくすぐっているのは事実。神奈川県のある中学の理科教師も、</本文>

</記事>

<手書き>

<ローマ字>Jitsugyo-teki ni naru keiko</ローマ字>

<和訳>実業的になる傾向</和訳>

<ローマ字>Dekiru dake oku no seito wo daigaku ni ireyo to suru</ローマ字>

<和訳>できるだけ多くの生徒を大学に入れようとする</和訳>

<ローマ字>Ato wa do natte mo zenzen kamawanai. De wa do suru noka? </ローマ字>

<和訳>あとはどうなってもかまわない ではどうするのか?</和訳>

<ローマ字>Daigaku no sensei ni kiku to, yobiko nado kara yoiseiseki de nyugakushita mono ga Daigaku no benkyoga sappari dekinai to</ローマ字>

<和訳>大学の先生に聞くと 予備校などから良い成績で入学した者が大学の勉強がさっぱりできないと</和訳></手書き>

原文の「いくらいい案が出ても・・」という記述から、政府や文部省の教育改革の取り組みに対する現場の教育への批判・懸念を主婦の言葉を通じて記したものであろう。オス校長は、教育改革の取り組みに対して、学校教育のビジネス化を危惧しているように感じられる。その効率指向の結果として、ひどい先生の出現を捉えていると思われる。手書き内容における2.2節の「教員養成と教師の質の向上」、2.8節の自立より受験を目指す「日本の教育」の問題が関係するように思われる。しかし処方箋が存在しないのが問題の中の問題であろう。最後に予備校で受験テクニックに長けた学生の学習意欲が乏しいことに触れている。

4.3 五十パーセント教育

図7に示す記事と手書き内容も教師の熱意に関するものである。傍線(XMLデータでは下線)はオス校長が付したものと思われる。

<記事:出典不明><本文>「・・・？」で話題を投げかけた中津燎子女史は、語学訓練においてさえ五十パーセント教育を主唱している。教えて伸びるのは半分、半分は学ぶ側の努力に求めなければ真の力は育たないというのである。制度やカリキュラムの工夫はもちろん必要だが、教師の構えが最終的なカギをぎっている。</本文></記事>

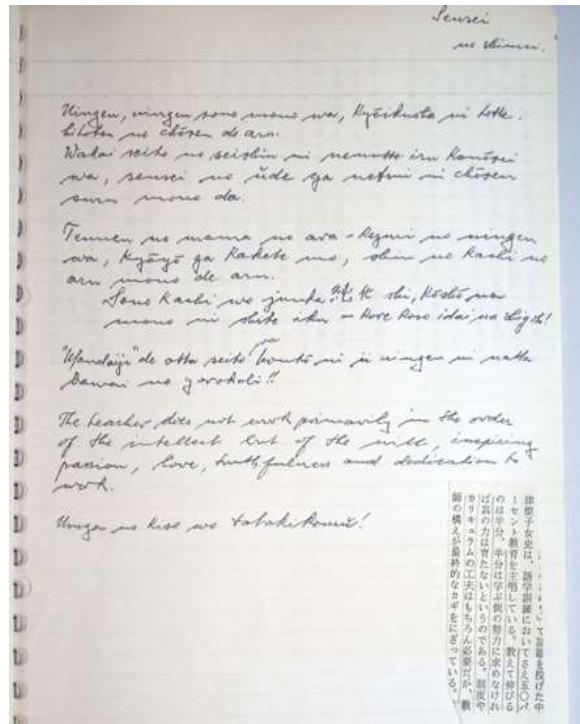


図7 新聞切り抜きの例

Wikipediaによると、「中津 燐子（なかつり ようこ、1925年10月19日 – 2011年6月15日）は、日本の評論家、英語教育者。福岡県福岡市博多生まれ。1928年からソビエト連邦のラジオストクで過ごし、1937年に帰国。国連軍（占領軍）の特別電話台で交換手として働き、1956年から米国留学。1974年第5回『なんで英語やるの?』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。英語発音訓練研究の『未来塾』を開設し、顧問をつとめた。」と記されている。

この記事に対して、オス校長は長文の感想を下記のように記している。

<手書き><ローマ字>Ningen, ningensonosonomonowa, kyo-ikushan ittotte hitotsuno cho-sen dearu</ローマ字>

<和訳>人間、人間そのものは、教育者にとって一つの挑戦である。</和訳>

<ローマ字>Wakai seito no seishin ni nemutte iru Kano-sei wa, sensei no ude ga netsui ni cho-sen suru mono da.</ローマ字>

<和訳>若い生徒の精神に眠っている可能性は、先生のうでが熱意に挑戦するものだ。</和訳>

<ローマ字>Tennen no mama no ara-kezuri no ningen wa, kyo-yo-ga kakete mo, shin no kachi no aru mono de aru.</ローマ字>

<和訳>天然のままの粗削りの人間は、教養が欠けても、眞の価値あるものである。</和訳>

<ローマ字>Sono kachiwo junka 純化 shi, ko-sho-wo***

ni shite iku --- Kore koso idai na shigoto!</ローマ字>

<和訳>その価値を純化し、高尚をものにしていく --- これこそ偉大な仕事！</和訳>

<ローマ字>“Mondaiji” de atta seito wa honto ni ii ningen ni natta baai no yorokobi!!</ローマ字>

<和訳>“問題児”であった生徒がほんとにいい人間になった場合の喜び！！</和訳>

<英語>The teacher does not work primarily in the order of the intellect out of the will, inspiring passion, love, kindness and dedication to work.</英語>

<和訳>教師は知的な意志の断片で仕事をするわけではない。内的な熱意、愛、優しさ、献身で仕事に励む</和訳>

<ローマ字>Ningen no riso wo takaki*****!</ローマ字>

<和訳>人間の理想を高き*****！</和訳></手書き>

Educationの原意が引き出すことにあるので、中津 燐子氏の教えて伸びるのが50%，生徒の熱意を引き出すことが50%という考えはそれなりの説得力を感じる。それに対して、オス校長は、手書きの2.4節で記している内容と同様の教育の原点を温かく力強く記述しているように感じる。

4.4 その他の切り抜き記事

以上の3例の他にオス校長がコメントしていない下記のような記事があった。やはり教師の問題に関する内容である。

4.4.1 聖職者か労働者か

聖職者か労働者かという問題を論じた記事があった。その最初のパラグラフは下記の通りである。

<本文>先生は、聖職か労働者か、という議論が今もなおつづいている。先生という仕事は、当然聖職だと思う。だからといって安い給料、貧しい生活でもがまんすべきだとは全く思わない。人間らしい生活ができるように、さらに先生として緩急活動が充分できるような、収入が保証されなければならない。・・・</本文>

聖職者か労働者かという議論は、日教組が生まれた1950年代の議論であり、生活する労働者でありながら、人を教える聖職的な存在であることは本来議論の余地は存在するとは思えない。上記の記事もそれを指摘しているが、それを問題にする日本の教育風土の改善が課題である。

4.4.2 教員養成注文あり

教員養成に関する記事もあった。戦前の師範学校による教員養成から、戦後の開放性養成への移行の問題を論じている。今さら開放性養成を否定する訳には行かないが、実務的実習不足が問題提起されている。

<本文>教員養成、注文あり：まず、開放性養成か教員養成大学による養成かという問題であるが、今や一般大学による養成も年数を経、今さら制度がえすることも難しいと思うので、これは現行の開放性養成でよいと思う。しかし、その教職課程の単位とその学習内容について言いたい。今、教育実習生に質問してみても、欠けているのは実務的実習であるようだ。・・・</本文>

個人的に、職業能力開発総合大学校で、職業訓練指導員の養成に取り、退職後も顧問として指導員の養成に関わったので、日本の中等教育における実務的教育の問題は痛感させられた。

4.5 切り抜き記事に関する総括

以上、切り抜き記事に関して紹介したが、全てが教師の問題であることに注目すべきであろう。

5. 雑誌のコピー

5.1 しっかりせよ学校教師

雑誌コピーは、表題が明確な2種類の記事と、表題が不明な3種類の記事であった。全て教師のあり方に関する内容で、オス校長が現場の教師のあり方について真剣に考えていたことを物語る。その点に関しては、先の切り抜き記事と全く同様である。

図8に示す、桜井保という著者による「しっかりせよ学校教師」という記事がある[6]。Voiceという雑誌の1984年5月号に記載されている、教室崩壊のような学校の混乱に対して、強権的な管理による統治を提案している。この思想は、明らかに民主主義に反する非常識なものであるが、このような主張が堂々と雑誌に掲載されるということは、それなりの支持基盤が社会的に存在することを物語る。

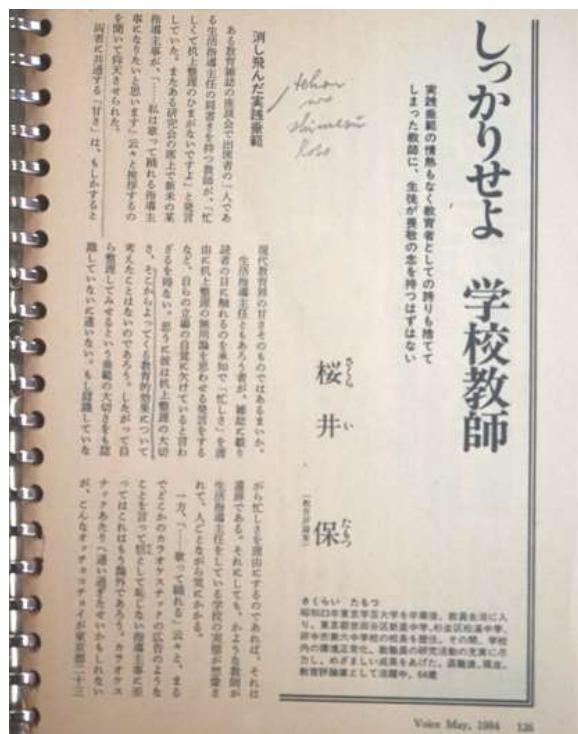


図8 雑誌記事コピーの例

<本文>職員室の机上整理ができない不精者の教員がいて、このような人間に限って批判・反論する。このような教育現場を放置してはいけない。机上整理は、教職員会議で決めることではなく校長の指示で行う必要がある。机上整理を強行した結果、教員室が明るくなった。生徒も見ており教育効果があった。机上整理だけでなく、服装や身だしなみも問題である。生徒に髪を切れという指示を出したら、長髪の先生がその盾になった。生徒におもねる教師がいるから指導ができない。生徒同士がセックスしても叱れない。教師には法以前の法がある。「何をなすべきか」よりは「何をしてはならないか」が重要で、教師には自分自身に対する厳しさが要求される。・・・</本文>

オス校長が、桜井氏の提案に賛成するとは思われないが、先に2.6節で記述した、日本の教育において生徒を甘えさせているというオス校長の認識を別の側面から問題提起する内容と思われる面があるので、その事例として複写したのではないかと推察される。

5.2 期待される教員の資質・能力

出典不明であるが、「期待される教員の資質・能力」というタイトルで、木川達爾という文教大学の教授が書いた図9に示す記事のコピーが収録されている。



図9 雑誌記事コピーの例

ヘッダーに「セミナー管理職」と書かれているので、教育研修の関連のレジメを記事にしたものではないかと推察される。

<本文>中央教育審議会は下記6項目を文部大臣に答申した。この内容は誰よりも先ず、校長・教頭が思索し教師を生かす指導に当たることが望まれる。

1. 教師は広い教養を持つことが期待される
 2. 教師には豊かな人間性が求められる
 3. 子供に対する深い教育的愛情を持つ教師が期待される
 4. 使命感に燃える教師が期待される
 5. 教師には優れた指導力が期待される
 6. 子供との心のふれ合いを持つ教師が期待される
- 以上の6項目に関する、具体的な内容を掘り下げて個人的な考え方を掘り下げている。・・・</本文>

木川達爾を Wikipedia で調べると、「長野県諏訪郡豊平村（現茅野市）出身。1940年東京府師範学校卒、同附属小学校、1949年東京学芸大学附属豊島小学校教諭、1957年東京都教育委員会指導主事、東京都立教育研究所研究教育部長など、1975年文教大学付属中学校・高等学校、小学校校長、文教大学教授、1990年定年、名誉教授。文教大学学園理事。木川達郎住友大阪セメント取締役常務執行役員の父。」とあり、戦前の師範学校卒の教育専門家である。中教審などの戦後の教育行政を支える戦前的な思想の持ち主と思われる。オス校長がこのような思想に賛同するとは思われないが、文部省の教育行政の方針を把握するうえでファイルしていたと思われる。

5.3 教師と子供のふれあい

藤原藤祐という教育専門家による記事である。 Wikipediaによると、「通信簿、教育研究のための調査票の設計と事例、教育情報の活用と管理、校内研究ハンドブック、学校充実の条件、学級担任評価ハンドブック、通信簿の見方・考え方、みずからをみがく先生、学校のための教育研究法、講座・校長学などの著作あり」とのことである。

<本文>卒業式を迎えると太宰治の「葉」の冒頭で引用されている「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」というヴェルレエヌの言葉に苛まれること。教師は、最も高貴な仕事であるが、自分の至らなさに苛まれる仕事でもある。卒業式はその不安が最高潮に達する。彼の言葉は「人間の存在意味を問うている」ものであり、教職の意義を問題提起している。人間関係に温かい心の交流のあることは、教育を成立させる基本要件である。マルセーユのリセーの学校の女性校長の話を聞いて共感した。「校長として気になることは、教師と生徒との間に温かい心の交流があるかということ。そうあって欲しいと願っている。」教育の本質は国境がない。体罰が必要と言う教師が70%に達している。それが対教師暴力として跳ね返ってくるのではないか。</本文>

ヴェルレエヌは、ポール・マリー・ヴェルレーヌ (Paul Marie Verlaine, 1844年3月30日 – 1896年1月8日) で、フランスの詩人である。

聖職としての教師は、撰ばれている職業であり、そのことを自問自答する内容である。2.2節でオス校長が述べている日本の教師が、サラリーマン化していることへの批判であるが、具体的な処方箋が不在なのが問題である。

5.4 寺子屋の師匠

この記事は、途中からの複写で、出典、タイトル、著者等の基本情報が不明である。だが、最近の教師が、生徒の名前が分からぬので名札を使用する現状に対して、江戸時代の寺子屋の師匠を例にして教育の意義を考察している。

<本文>昔の寺子屋は名札を使わなかった師匠と子供の関係は密であったが権威主義的であった。師匠の子供との関係は、その家庭にも及び、子供の性格や職業適性までもアドバイスできた。仰げば尊しわが師の恩は当然であった。成長期の子供に一人の師匠が全面的に関わるのは良くない面もある。見方が制約され、視野が狭くなり、批判力が育たない。そのような問題はあっても、名札を見なければ生徒が分からぬ教師よりも教育の本質を捉えていた。個性的な教師が生きにくいと思われる現状では、生徒にとって「わが師」と呼べる教師の存在は少ないのでない。現在は、江戸時代ではないので、「師」など求めずクールに生きるのが現代的なのかもしれない。しかし、「仰げば尊し・・・わが師の恩を考えさせないような現状の失業式は、無残である。この状況を変えることは、社会の風潮、政治状況が存在する限り、教師や親たちの努力では無理である。時代の流れに掉さず積極的な意欲は無理なのであろうか。しかし、教育の場は、最終的には教師と生徒の一対一の関係に収斂される名札で名前を確認する先生も寺子屋の師匠のように、個々の生徒に向き合うことが求められている。寺子屋には、現在の教育の場で失われたり軽視されたりしている教育の原点がうかがわれる。</本文>

フォス校長は、日本の伝統的な教育に興味を抱き、このコピーを自筆メモのノートに収めたのであろう。この記事も、教師のサラリーマン化の問題に対する問題提起であるが、やはり处方箋にはなっていない。

5.5 二種類の教師像

単一ページの複写でタイトルは不明である。田中と言う教育専門家に対してのインタビュー記事である。

<本文>教師像は二つに分けられる。その一つは、子供のお守りとでも言うべき人々で、雇人・労働者・奴隸のような存在である。このグループは注文通りやらなければ首を切れる。他のグループは、高僧・芸術家・マイスターのような人々で、三尺下がって師の影を踏まずという存在である。塾は、雇人の形態で機能しているが、教育機関の教師は、二つの顔を使い分けている。一方では高僧・芸術家・マイスターのような扱いを生徒、父兄に要求し、他方労働争議のように雇人の顔も使ったたかに生きている。このようないい加減な教師の生き方を変えないと国を誤ることになる。.</本文>

インタビュワーの田中氏への問い合わせ、中曾根内閣による教育臨調の話題が出ているので、1984年当時の記事である。この記事もサラリーマン化した教師に対する批判として位置づけられるであろう。

5.6 雑誌コピーに関する総括

以上、表題が明確な2つの記事と、表題が不明な3つの記事であるが、サラリーマン化した教師の現状と批判、その改善への展望に関する記事である。以上からフォス校長が現場の教師のあり方について真剣に考えていたことを物語る。その点に関しては、先の切り抜き記事と全く同様である。

フォス校長も、以上の新聞・雑誌情報と同様にサラリーマン化した教師に批判を持っていたと思われるが、その解決策が見つからないことが、問題の中の問題であり、教育者として宗教家としてそれを模索されたと思われる。その解答は、例えば2.7節の「教師のチームワークで自立教育を目指す」と言うような方向性が垣間見られるのであるが、2.8節の「日本の教育の問題：自立より受験」と言った壁が存在し、それを打破しなければ前に進めない状況を認識して立ち止まらざるを得ない状況であったと思われる。

6.まとめ・考察

以上、手書きメモ、英文タイプ・印刷、和文印刷、新聞・雑誌の切り抜き、雑誌のコピーについて2~5章で検討したが、内容的には2章の手書きメモで取り上げた各節の項目を基本に考えて良いであろう。これらの内容を通じてフォス校長が提起した問題は

- (1) 戦後民主主義は、人間教育への厳しさを失い、全面的に甘やかす教育になった
- (2) 現場教師の意識はサラリーマンであり、自らを聖職者と認識する教師は限られていた
- (3) 政府・自民党は人材育成に関して中教審に「期待される人間像」を提案させ、その文書に関連してフォス校長は日本の受験教育を「盆栽造り」に譬えた

(4) 自立した人材育成を目指す教育方針の障害になるのは、日本の国民の教育への過剰期待である。

(5) 日本では、社会の底辺で働くような仕事への配慮や価値観に関する教育が乏しい

というような問題提起をしている。さらにその解決への展望としては、

- (1) 教育の目的は理想的には時代や国境を超えて通用する自立的な人材の育成にある。
- (2) 本来の教育の目的は「自立した良い人間・立派な社会人」を育成することにあるが、それを日本の家庭や生徒の価値観とすることが重要。
- (3) ミッションスクールは、布教が目的のように語られるが、日本においては良い社会人としての優れた人間を養成することである。

というような項目が指摘されている。今後以上の内容についてさらに分析・考察したいと考える。

なお、3.6節の「手書きと印刷の相違」において記したが、この自筆メモ冊子が作成された時期を1984年前後と仮定すると、フォス校長は1983~84年当時文部省の視学委員に任命されており、1984年5月には勲四等旭日小授賞を頂いている。当メモ冊子における記述は、仮説に過ぎないが、その活動のためのメモであった可能性もある。

7.おわりに

本稿では、先の年次大会での報告[1]に基づきそのXML化されたデータを活用して意味的内容を把握することを試みた。その内容把握と分析に関しては概略のまとめを記したが、今後さらに検討を加えたい。

なお、DMH研究会の一端を担うデジタル人文学という学際的な分野は、現状では必ずしも明確な研究分野として検討・確立されているとは思われないが、本検討のような事例を通じて研究成果を蓄積する必要があると思われる。そのような活動の事例として参考になれば幸いと思う次第である。

本報告は、栄光学園同窓会アーカイブチームの責任者である青木嘉光様に予備検討の段階で貴重なコメントを頂きました。またドイツ語文章の翻訳に関しては東洋大学の市田節子先生のご協力を頂きました。ご両名の協力に感謝します。

文献

- [1] 大野邦夫，“栄光学園創立者による自筆メモの分析と考察”，2022年度画像電子学会年次大会講演論文, Aug. 2022
- [2] 永井道雄，“教師・この現実”，三一書房, 1957
- [3] グスタフ・フォス，“日本の父へ”，新潮社, 1977
- [4] ジョン・ダワー（三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳），“敗北を抱きしめて（下）”，岩波書店, p.56, 2001
- [5] グスタフ・フォス，“日本の父へ再び”，新潮社, 1987
- [6] 桜井保，“しっかりせよ学校教師”，Voice, pp.126–133, May, 1984